

## 講演記録

# 子どもに愛は伝わっていますか

——豊かな時代の親子関係を考える（前編）——

春日 耕 夫

（受付 2005年10月6日）

「子どもに愛は伝わっていますか」というテーマで話をさせていただきま  
す。まず始めに、そういったテーマでどういうことを私が話したいと思っ  
ているのか、といったあたりから話を始めたいと思うんですが、本日ここ  
にお集まりの皆さんは、それぞれ、親として、子どものことをとても大事  
に思っているんじゃないかなと思うんです。「よい子に育ててほしい」とか、「自  
分たちより幸せになってほしい」とか、「せめて人並みの暮らしができる  
ようになってほしい」とか、そういった形で、皆さん全員が心から子ども  
の幸せを願っているんじゃないかなと思うんです。だからこそ、今日はこんなに  
天気がいいのに、週末の貴重な時間を割いてわざわざこの会場までやって  
きて、「子育て講座」を聴こうとしていらっしゃるわけなんですよ。そう  
いった意味では皆さん全員が心から子どもを愛しているんじゃないかな。そう  
言ってますが間違いはないと私は思うんですが、しかし、その愛が子どもに伝  
わっているのかどうかということになってきますと、かなり怪しくなっ  
てきます。それどころか、子どものために思えばこそ、「ああしなさい」「こ  
うしなさい」と言いたくなって、朝から晩までガミガミ言って、結局は怒  
りやイライラばかり伝えてしまっているという、そういう可能性も大い  
にある。

ほんとに、子どものためだったら親は何でもしてやりたいと思っている。  
自分が欲しいものは我慢してでもしてやりたいと思っている。塾に行きた  
いと言うんだったらその費用ぐらいは出してやろうと思っている。大学に  
行きたいと言うんだったら大学にも行かせてやろうと思っている。それな

のに、子どもときたら勉強なんかろくろくしないで、朝から晩までゲームばかりやっている。そうしますと、もう、親としては、「いったいあなたは何なのよ!」「ゲームばかりしてるんじゃないの!」「少しぐらいは勉強もしなさい!」といった調子で、ついつい言ってしまいたくなる。

というわけで、本日ここにお集まりの皆さんは、それぞれ、親として、心から子どもを愛していらっしゃるんだろうとは思いますが、しかしながら、だからと言って、その愛が子どもに伝わっているという保証はどこにもない。むしろ、子どものために思えばこそ、朝から晩までガミガミ言って、怒りやイライラばかり伝えてしまっているという、そういう可能性も大いにある。さあ、皆さん。皆さんの場合はどうでしょうか。子どもに愛は伝わっていますか。もしかしたら、怒りやイライラばかり伝えてしまっているのではないのでしょうか、ということ、以上が本日の私の話のテーマであります。

それにしても、いったいなぜそういったテーマを選んだのか、その理由はいったい何なのか、ということについてなんです、皆さん、すでにご承知のように、「いま」という時代は、ある意味では、子どもたちにとって、非常に生きづらい時代だと私は思うんです。そういった時代のなか、いま子どもたちにとって一番必要なものは何かと言いますと、自分は自分でいいんだという感覚、あるいは、自分は自分のままで生きていいんだという感覚、と言っていいと私は思うんです。つまり、自分で自分を肯定できるという意味での「自己肯定感覚」ですね。あるいは、自分で自分を受容できるという意味での「自己受容感覚」と言ってもいいと私は思うんですが、いずれにせよ、そういった感覚を持てるということこそ、いま子どもたちにとっては何より必要なことだと私は思うんです。なぜなら、仮にそういった感覚を持てなかったとしますと、「自分は自分のままでいいんだろうか」とか「自分のままでここにいていいんだろうか」という不安を常に持たざるをえないということになってしまいますからね。そして、その結果、ついつい人の顔色ばかりうかがってしまって、自意識過剰になって、

春日：子どもに愛は伝わっていますか

対人関係場面で生きてはいけないということになってしまいますからね。それに対して、自分は自分でいいんだという感覚がありさえすれば「自分は自分でいいんだもーん」とか「人がどんな目で見ようといいいんだもーん」と言ってすませられるところを、自分は自分でいいんだという感覚がきちんと持てていない場合は、人から何か言われたらそれがすごく気になって、「自分がこう言ったら人はどう思うだろう」とか、「自分がこう言ったら変に思われるんじゃないか」とか、「自分がああいうふうに言ったことを人はどう思っただろうか」、なんて調子で気を使いまくってしまって、対人関係場面で疲れ切ってしまって、結局は学校にも行けなくなって、登校拒否とかひきこもりといった結果にもなりかねない、ということになってしまいますからね。

ですから、そういったなかできちんと生きていくためには自分は自分でいいんだという感覚を持てるということが絶対的に必要になってくると私は思うんですが、それでは、そういった感覚を子どもが持てるようになるためにはどういうことが必要なのか。

それは、もう、言うまでもなく明らかですよ。「お前はお前でいいんだよ」と言ってくれる「誰か」がいてくれること、なんですよ。だって、「お前はお前でいいんだよ」と言ってくれる人が誰一人としていないところで「自分は自分でいいんだ！」なんて思ったところで、それは所詮、独りよがり過ぎませんからね。そんな独りよがり自己肯定感覚を身につけることなど、できるわけがありませんからね。自分は本当に自分のままでいいんだ、本当に自分のままでここにいていいんだという正真正銘の自己肯定感覚を身につけることができるためには、「お前はお前でいいんだよ」と言ってくれる「誰か」がいてくれることが絶対的に必要なんですよ。そういった「誰か」がいてくれるからこそ自分は自分でいいんだと心の底から思うことができるし、人から何か言われても「自分は自分でいいんだ」と肩肘張らずに思うことができるんですよ。

そうしますと、子どもが正真正銘の自己肯定感覚をもって生きていくこ

とができるためには、「お前はお前でいいんだよ」「私にとってはかけがえのないお前なんだよ」「まわりの人が何と言おうと私にとっては大事なお前なんだよ」と言ってくれる「誰か」がいてくれるということが決定的に重要になってきます。あるいは、もう少し厳密な言い方で言いますと、そういった「誰か」が間違いなくいてくれると子どもが実感できているということが決定的に重要になってきます。あるいは、さらに裏返しの形で言いますと、そういった「誰か」の思いが子どもにきちんと伝わっているということが決定的に重要になってきます。つまり、「お前はお前でいいんだよ」「私にとってはかけがえのないお前なんだよ」「まわりの人が何と言おうと私にとっては大事なお前なんだよ」といった思いですね、そういった思いを仮に「愛」と呼ぶことにするとしますと、その愛が子どもにきちんと伝わっているということが決定的に重要になってきます。そうしますと、ここで決定的に重要な問題となってくるわけですね。子どもに愛は伝わっていますか、ということが。

先ほども言いましたように、本日ここにお集まりの皆さんは、どなたもが、子どものことをとても大事に思っているんじゃないかなと思うんです。愛という言葉で言うのであれば、子どもを心から愛しているんじゃないかな。そう言ってもまず間違いないと私は思うんです。しかし、愛してさえいればそれで充分、なんてわけではないんですね。その愛が子どもに伝わってなければダメなんですね。どんなに子どもを愛していても、その愛が子どもに伝わっていないかぎり、子どもにとっての「そういった誰か」には絶対になんかやれないわけですからね。ですから、子どもを愛する気持ちがあるのだったら何とかしてその愛を子どもに伝えていかなければならない。というより、何としてでもその愛を子どもに伝えていかなければならない。

ところが、これが、現実には、非常に難しいことなんですね。言葉で言うのは簡単ですけど、実際に子どもに愛を伝えるとなると、これがなかなか難しい。特に、豊かな時代になればなるほど難しくなる。なぜ難しくなってしまうのか、という点につきましては、本日の私の話のメイン・テーマ

春日：子どもに愛は伝わっていますか

のひとつですから、後で詳しくお話しするつもりなのですが、いずれにせよ、豊かな時代になればなるほど愛を伝えることが難しくなる。

そうしますと、いったいどういうことになってくるかということなのですが、いったいどうすれば子どもに愛は伝えられるのか、子どもに愛を伝えるためにはどうすることが必要なのか、そういった問題について私たちは真剣に考えてみななければならないということになってくる。貧しかったかつての時代の親たちだったら敢えて考えてみる必要などなかったんでしょうに、豊かな時代に生きる私たちはあらためてそういった問題について考えてみなければならなくなる。それが「いま」という時代に生きる私たちの宿命なのだ。そう私は思うんです。そういった意味を込めて、本日は、「子どもに愛は伝わっていますか」というメイン・タイトルに加えて、「豊かな時代の親子関係を考える」というサブ・タイトルを付けさせていただいたわけであります。

以上が本日私が話したいと思っていることの大まかな趣旨であります。

\*

それでは、本題に入ります。

豊かな時代になればなるほど子どもに愛を伝えることが難しくなってしまうのはなぜなのか、いったいどうすれば子どもに愛は伝えられるのか、そういった問題について考えてみたいというわけなのですが、そういった問題について考えるために、貧しかったかつての時代から豊かな時代へと変化してくるなかで家族や親子関係のあり方はどのように変わってきたのか、といったあたりから話を始めたいと思います。

そこで、お配りした資料をご覧くださいなのですが、まず<資料①>は「雨」と題する佐藤代里子さんという方の詩、<資料②>は「すみ山」と題する石井敏雄さんという方の作文であります。いずれも無着成恭さんという方が編集なさった『やまびこ学校』という作文集に収録されている

作品なんです、この『やまびこ学校』という作文集、ご存じの方もいらっしゃるかも知れませんが、非常に有名な作文集なんですよ。初版本が1951年(昭和26年)に出版されているわけなんです、1951年と言えば、皆さん、ご存じのように、第二次世界大戦後の混乱がまだまだ収まっていない時期で、日本全国、非常に貧しい状態にあった時期なんですよ。で、無着成恭さんという方は、ちょうどその頃、東北地方のある村で中学校の先生をなさっていたんです。

その当時、小学校や中学校では、教育のやり方として、子どもたちに詩や作文をどんどん書かせていくというやり方が行われていましてね。「生活綴り方」と呼ばれて非常に盛んに行われていたんですが、無着先生という方はそういった教育運動のもっとも代表的な担い手のひとりだったわけですよ。で、自分のクラスの子どもたちに詩や作文をどんどん書かせていて、それを一冊の本にまとめて作文集の形で発表なされた。それが『やまびこ学校』だったわけですよ。

この作文集は発表されるやいなや大変な評判になりましたね。それをもとに映画まで作られて、全国的に上映運動が繰り広げられたりもしたんですが、そのなかに江口江一君という人の作文があるんですよ。もう、見事としか言いようのない作文で、私なんか何度読んでも涙が出てしまいそうになるぐらいに悲しい作文と言いましょか、とにかく見事な作文なんです、それが特に大変な評判になりました、最後には文部大臣特別表彰まで受けたというエピソードがあるぐらいに有名な作文集『やまびこ学校』というわけなんです、それはともかくとしまして、この作文集が最初に出版されたのが先ほども言いましたように1951年だったということ、つまり、第二次世界大戦後の混乱がまだまだ収まっていない時期で、日本全国、非常に貧しい状態にあった時点だったということ、その点に注目しておいていただきたいんですよ。で、そういう時代に中学時代を送った子どもたちが書いた詩や作文、それが<資料①>と<資料②>の詩や作文というわけですよ。つまり、日本がまだまだ貧困のどん底にあった時代の子

春日：子どもに愛は伝わっていますか

どもたちが中学生だった時点で書いた詩や作文、それが<資料①>と<資料②>の詩や作文というわけですね。

次に、<資料③>をご覧ください。「父と母の働く姿から」という作文です。山木ゆかりさんという方の作文なんですけど、この方は1969年（昭和44年）の生まれということになっています。1969年といえば、皆さん、ご存じのように、第二次世界大戦後の大混乱のなかから出発した日本社会が驚異の高度経済成長を成し遂げていって、世界有数とまで言われた豊かさに到達した時点なんですよ。ということはどういうことかと言いますと、山木ゆかりさんという方は、要するに、世界有数の豊かさのなかに生まれ、世界有数の豊かさのなかで成長していった子どもだったというわけですね。そういう人が中学生だった時点で書いた作文、それが<資料③>の作文というわけですね。

というわけで、この二つの時点で子どもたちが書いた詩や作文を比べてみて、その比較を通して、貧しかったかつての時代から豊かな時代へと変化してくるなかで家族や親子関係のあり方はどのように変わってきたのかということについて考えてみたい、というわけであります。

それでは、まず、『やまびこ学校』のほうからから見たいと思います。<資料①>をご覧ください。「雨」と題する詩です。読んでいきます。

「山へいもまきに行った。……」

要するに、山にいもを植えに行ったというわけですね。この場合、「山」と言っても、松とか杉とかが生えている山、というわけではないんですね。山のとっぺんまで耕して畑になっている、その畑にいもを植えに行ったという意味なんですよ。で、「兄さんはダラを……」。「ダラ」というのは、その<注>にありますように、「しもごえ下肥」ですね。「下肥」の「シモ」というのは「オシッコ」や「ウンチ」のこと。高齢者介護の世界で「シモの世話をする」と言うときの「シモ」ですね。その「オシッコ」や「ウンチ」を溜めておいて腐らせるとそれが肥料になる。いまだったらオシッコやウン

チは単なる汚いものでしかありませんけど、当時の農家にとっては何より貴重な肥料だったんですね。なにしろ、貧乏でしたからね、無闇にお金を使って肥料を買うというわけにはいかなかったんです。ですから、何とかして自家製の肥料で間に合わせたい。その場合、牛とか馬とかを飼っている農家でしたら牛や馬の排泄物で自家製堆肥が作れるわけなんです、牛も馬もない農家だったらそうはいかない。だけど、そういった農家でも作れる肥料がひとつだけある。それが下肥だったわけですね。ですから、当時の農家にとっては下肥は非常に貴重な肥料だったんです。「汚い」なんて言ったらどやされてしまうくらい、大事な大事な肥料だったんです。で、その「ダラ」を兄さんが担いで、私はいもの種を背負って、弟はカリンサンを背負って……。「カリンサン」というのは「過燐酸石灰」のことですね。工場で作った肥料で、お金で買った肥料です。その「カリンサン」を弟は背負って、山のとっぺんの畑までウンウン登っていきます。畑には草が生えています。その草を弟が削って行って、その後を私が一番耕して、兄さんがさくさくと畝<sup>うね</sup>をたてていきます。汗がポタポタ落ちてきます。「暑いなあ」と言って腰を伸ばして遠くを見ると、「虚空蔵さま」と地元の人が呼んでいる山のほうに白い雨が降っています。その雨がだんだんこちらに近づいてきます。「雨だ！」と私が言うと、兄さんも弟も腰を伸ばして顔を上げます。風がごっごと吹いてきて、雨がどつどとやってきます。しかし、それでも仕事はやめません。「なあに、こんな雨、すぐやむさ」。兄さんはそう言って「みの(蓑)」を着ます。「蓑」というのはおわかりですね。一種の農作業用手作りレインコートですね。稲藁<sup>いなわら</sup>なんかで作ったりするんですが、その蓑を着て、雨のなか、そのまま仕事を続けます。風は次々と雨を運んできます。「こんなに降ってもやめないのかなあ」と思っていると、傘から冷たい雨が漏れてきて、首のところに落ちてきます。思わず「ううっ」と言ったら弟も、「ひどいなあ」と言って顔を上げます。弟の蓑からは雨すだれがポタポタ落ちています。間もなく兄さんが言います。「これじゃあダメだ。仕事にならない。仕方がないからもう帰ろう」と。



春日：子どもに愛は伝わっていますか

以上、「雨」という詩であります。

ご覧のように、子どもたちが一生懸命働いている様子が描かれています。その働きぶりといったら、お父さんやお母さんのお手伝い、なんてものではないんですね。お父さんもお母さんもないところで、子どもたちが子どもたちだけで働いているんですね。この詩を書いた佐藤代里子さんがこの時点で中学二年生ですから、年齢的には13歳か14歳。お兄さんはおそらく15歳か16歳。あるいは、せいぜい17歳。弟は多分10歳か11歳。あるいは12歳といったところでしょうか。いずれにせよ、まだまだ子どもといまだだったら言われて当然の子どもたち。そういった年齢の子どもたちが子どもたちだけで一人前に働いている。そういう世界がこの詩には描かれているわけですね。

次に<資料②>の「すみ山」ですが、これは、もう、時間的な余裕がありませんから、ここで読み上げることはやめにします。是非後で読んでいただきたいと思うんですが、この作文でも子どもが一生懸命働いている様子が描かれています。家の仕事が忙しいときは学校にも行かず、朝から晩まで働いています。仕事が暇なときは「今日は学校に行っていないぞ」と家族の人に言われて大喜びで学校に行くわけなんです、仕事が忙しいときは学校にも行かず、朝から晩まで働いています。そういった形で子どもたちが一生懸命働いていた。これが貧しかった時代の子どもの暮らしだったんです。で、そういった世界がこの作文でも描かれているわけですね。

それでは、いったいなぜそういった暮らしをしなければならなかったのか、なぜ子どもたちがそこまで働かなければならなかったのか、という問題なんですが、それは、やっぱり、働かなければ食べていけなかったからなんですよ。貧乏でしたからね、一生懸命働かないと食べてはいけなかった。一家が飢え死にしなければならなかった。そういったなかで飢え死にせず、一家が生き延びていくためには、一生懸命働かざるをえなかった。必死で、汗水流して、朝から晩まで働いて、働きずくめに働いて、そうやって働かないと食べてはいけないという世界がまずあって、そういった世界

のなかで押しつぶされないで生きていくためには、生きていくための闘いを必死で闘わざるをえなかった。

その場合、お父さんひとりの働きでその闘いを闘うことができるんだったら、お母さんに働いてもらう必要はなかったんです。お母さんは遊んでいてもよかったです。専業主婦をやってもよかったです。だけど、そういうわけにはいかなかったんです。お父さんひとりの働きでは暮らしを支えることができなかつたから、お母さんにも働いてもらわなければならなかったんです。そういった意味では、昔のお父さんたちは、弱くて非力な存在だったわけですね。なにしろ、お父さんひとりの働きでは暮らしを支えることができなかつたわけですからね。よく「昔の親父は強かった」なんてことを言う人がいますけど、あれは本当は間違いなんですね。まったく逆だったんですね。それに比べると、いまのお父さんたちは偉いものだと思いますよ。「女房と子どものひとりやふたりワシひとりで養ってみせる！」なんておっしゃるお父さんがいっぱいいらっしゃるわけですからね。だけど、昔のお父さんたちは非力でしたから、そういうわけにはいかなかったんです。お母ちゃんにも一緒に働いてもらわないと暮らしを支えることができなかつたんです。だから、言わざるをえなかつたんです。「お母ちゃん、お母ちゃん、お前も一緒に働いてくれや！」って。「ワシひとりではどうにもならんじゃんか！」って。だから、お母ちゃんもお父ちゃんと同じぐらいに、というより、むしろ、お父ちゃん以上に、働かざるをえなかつたんです。そうやって夫婦が共に闘って、必死の思いで暮らしを支えていく。それが貧しかった時代の家族だったんです。

で、お父ちゃんお母ちゃんだけの働きで暮らしを支えることができるんだったら、おじいちゃんおばあちゃんはゲートボールでもしていればよかったです。だけど、そういうわけにはいかなかったんです。おじいちゃんおばあちゃんはおじいちゃんおばあちゃん、精一杯頑張ってもらわないと、一家の暮らしを支えることができなかつたんです。だから、言わざるをえなかつたんです。「おじいちゃん、おばあちゃん、ゲートボールなん

春日：子どもに愛は伝わっていますか

かして暇があったら、一緒に頑張ってくれや！」って。「こっちにきて一緒に闘ってくれや！」って。で、それで一家の暮らしが成り立っていくんだったら、子どもは遊んでいてもよかったんです。学校に行って勉強を頑張っていればよかったんです。だけど、そういうわけにもいかなかったんです。それでもまだまだ足りなかったんです。だから言わざるをえなかったんです。「おーい、お前たちも頑張ってくれや！」って。「こっちにきて一緒に闘ってくれや！」って。「ワシらだけではどうにもならんじゃんか！」って。だから、子どもたちも一生懸命働かざるをえなかったんです。そうやって一家が総出で働いて、朝から晩まで働いて、そうしてはじめて食っていける。飢え死にしないで生きていける。これが貧しかった時代の家族であり、親子関係だったんです。

としますと、貧しかった時代の家族や親子関係について、どういうことが言えるでしょうか。はっきり言えることは、何よりもまず、貧しかった時代というのは「生きる」ために必死にならざるをえない時代だったということ。「よりよく生きる」とか「生き甲斐をもって生きる」などといった意味での「生きる」ではなく、とにかく食って生きていくという、飢え死にしないで生き延びていくという、そういう意味での「生きる」ということ、そのこと自体のために必死にならざるをえない時代だったということ。当然、「子どものために」なんて二の次三の次で、何とかして一家が食って生き延びていくということそれ自体を家族の最優先課題とせざるをえなかったということ。そういった意味では、この時代の家族や親子関係は、一家が食って生き延びていって、何とかしてサバイバルしていくということそれ自体を最優先課題として追求する「生存追求最優先型」の家族であり、親子関係だったということ。そう言っているいい私は思うんです。そうしますと、この時代の家族や親子関係の特徴として、「生存追求最優先」という特徴を、まず第一の特徴として挙げてよいと思うんです。

次に、「生存追求最優先」ということになってきますと、言うまでもなく、一家が食って生きていくために、何がなんでも働かなければならないとい

うことになってきます。当然、家族や親子関係のあり方としては「働くこと」中心、つまり「労働中心」ということになってきます。したがって、貧しかった時代の家族や親子関係の特徴として、「労働中心」という特徴を、第二の特徴として挙げてよいと私は思うんです。

さらに、「労働中心」ということになってきますと、言うまでもなく、「大人中心」ということになってきます。大人が中心になって働く。大人が中心になって、その指図に従う形で子どもたちも働いていく。そういった意味での「大人中心」。ですから、この時代の家族や親子関係の特徴として、「大人中心」という特徴を、第三の特徴として挙げてよいと私は思うんです。

というわけで、貧しかったかつての時代の家族や親子関係の特徴として「生存追求最優先」で「労働中心」で「大人中心」だったという特徴を挙げてよいと私は思うんですが、しかし、そういった特徴はすべて、社会が豊かになっていくにつれて、どんどんなくなっていってしまいます。そして、それとはまったく違った形の家族や親子関係のあり方が新しく現れてくるということになってきます。そこで、次に、そういった点について見ていくために、次の作文を見てみたいと思います。

\*

<資料③>をご覧ください。「父と母の働く姿から」という作文です。山木ゆかりさんという方の作文なんですが、この方は山口県萩市沖の日本海に浮かぶ<sup>みしま</sup>見島、と言え、皆さん、すでにご存じかも知れませんが、「おにようず(鬼楊子)」と呼ばれる<sup>おおだこ</sup>大凧と見島牛の成育地として有名な島ですよ。その島でたばこの栽培をやっている農家の子どもさんだったようでもあります。

この方は、先ほども言いましたように、1969年の生まれ。何と言っても農家の生まれですから、単純に余裕のある豊かなおうちの子どもだったと言ってしまうとよいのかどうかわかりませんが、しかし、少なくとも時代

春日：子どもに愛は伝わっていますか

としては非常に豊かになった時代。そういった時代に生まれ、そういった時代のなかで成長した子どもだったことは間違いない。その山木ゆかりさんが中学生だった時点で書いた作文、それがこの作文というわけですね。

読めばすぐわかりますように、この作文には豊かな時代の家族や親子関係のあり方が実に見事に描かれています。そこで、少々長い作文ではありますが、そのまま読んでみたいと思います。こういう作文です。

「ゆかり、また明日も四時にベルを合わせてやれやい」と母の声。私は時計を合わせながら「ちょっと早いんじゃないかな。二人とも最近五時間くらいしかねむってないのに」。私の頭の中には父と母の仕様の様子が浮かぶ。この気持ち、誰かに伝えたい。わかってもらえなくてもいい。でも、話を聞いて欲しいのです。

私の住む見島は萩市から45キロの日本海に浮かぶ人口二千人の農業と漁業の島です。私の家では今年からたばこの栽培を始めました。たばこを始めると朝も晩も忙しいと母から聞かされていました。四月に苗を植え始め、七月の今はたばこを取り始めています。

父と母は四時に起きて畑へ行きます。私が学校から帰ってくる乾燥したたばこを母が束にしており、私もすぐ手伝いを始めます。「母さん、後悔してない」と聞いた私に、母は何も言わないまま、真っ黒になった手を休めないで、たばこを二階に父と運びます。汚れている父の服からは汗がしたたっています。

時計がようやく七時を回る頃、父と母が家に入ってきます。父は風呂へと急ぎますが、母の仕事は終わったわけではありません。食事の支度を始めている母、何一つ言わないが、疲れていることは私にも痛いほどわかります。少しでも手伝おうと思って私も食器を並べます。「父ちゃん、御飯食べようや」と母のかすれた声。みんなで食べ終わると一人二人と食卓から離れていきます。

食べ終わった後の母の姿、それは誰にも見られたくないとは私はいつも

思っています。やっと母が休める時間がきたのです。父は居間で、母は台所のすみで、本当に疲れたという姿で目を閉じて、しばらくの間二人とも居眠りを続けます。この二人を見ているとどんな事があっても起こしたくないという気持ちになり、何も言えないまま、じっと顔を見つめていると何だか、もう仕事なんてさせたくない、こんなにづらい仕事で父と母を苦しめたくない、だけど私みたいな14歳の子どもに何ができるだろうか、という気持ちで心の底が熱くなってきます。母は「ゆかりは勉強を一生懸命やればええ」と言うばかりです。本当に子どもはそれでいいのだろうか。私は何か心にひっかかるものがあります。

けれども、私は父や母の働く姿から、苦しいこと、づらいことにもくじけず、強く生きなくてはならないと感じ、いつも自分自身を見直しています。今、私ははっきり言えます。もし自分自身に負けて今という今を精一杯生きていない人、自分勝手な不満を持ってつっぱっている人、もう一度自分自身を見つめ直して欲しい。誰でも一生懸命働いている父や母のことを考えれば、一日を無駄に過ごしてられる人なんていないはずです。私は父や母に何もしてあげられない。でも、私に今できることは私なりに精一杯手伝い、人に迷惑をかけない素直な中学生として一生懸命がんばることだと思っています。

以上、山木ゆかりさんの作文であります。

ご覧になっていかがでしょうか。『やまびこ学校』的世界とはまったく違う世界が描かれているということ、おわかりいただけますでしょうか。特にアンダーラインの部分に注目していただきたいんですが、この作文でも厳しい労働を一生懸命やっている家族の姿が描かれています。しかし、その労働を実質的に担っているのはお父さんとお母さんだけなんです。子どもはその世界にはいないんですね。もちろん、夕食の準備の手伝いなど、いわゆる「お手伝い」的なことは子どもも一生懸命やっています。学校から帰ったらすぐ、お父さんやお母さんの仕事の手伝いもしています。しか

春日：子どもに愛は伝わっていますか

し、そういった仕事を中心的に担い、暮らしを支える役割を全面的に担っているのは、あくまでも、お父さんとお母さんなんですね。子どもはせいぜい脇役でしかないんですね。ですから、子どもという立場の山木ゆかりさんとしては、お父さんお母さんが苦勞している姿を見ながらも、胸を痛めているしかないんですね。「お父さんお母さんがかわいそうだ！」って。「どうしてこんなに苦勞しなければならないのか！」って。「こんな苦勞はもうさせたくない！」って。

もちろん、だからと言って、この作文を書いた山木ゆかりさんが自分勝手にわがままで「自分さえよければ……」タイプの子もだった、なんてわけではないんです。むしろ、非常に思いやりがあって、親思いで、人並み以上に心優しいお嬢さんだったと私は思うんです。だからこそ、山木ゆかりさんはお父さんお母さんの手伝いを少しでもしようと心を砕いているわけですし、お父さんお母さんの苦勞に思いを馳せながら、一生懸命胸を痛めているわけなんですよ。しかし、そうやって一生懸命胸を痛めながらも、そこで山木ゆかりさんは思ってしまうんですね。「だけど……」って。「いったい私に何ができるんだろう?!」って。「何にもできっこないじゃないか！」って。「だって私は子どもなんだもん！」って。「わずか14歳の子どもなんだもん！」って。

しかし、皆さん、思い出していただきたいんですが、『やまびこ学校』的世界では「わずか14歳」の子どもが一生懸命働いていたわけなんですよ。親と共に。そして、親と対等に。もちろん、「親と対等に」と言っても、たとえば、お父さんが百の仕事をする間に子どもはせいぜい60か70程度の仕事しかできないとか、お父さんはいっぺんに百のものを運べるのに子どもは50か60程度のものしか運べないというように、仕事量とか仕事能力といった点では「対等に」とは到底言えなかったかも知れませんが、しかし、お父さんはお父さんなりに百パーセントの力を出し切って働き、子どもは子どもなりに百パーセントの力を出し切って働くという点では対等に、親も子どもも働いていた。圧倒的な貧しさに押しつぶされそうになりなが

らも、大人と子どもといった区別なしに、生きるための闘いを親子ともどもに闘っていた。そういった意味では「共に闘う」関係。厳しい貧しさと過酷な労働という共通の敵を相手に「共に闘う」関係。したがって、敢えて言うならば「戦友的」関係。あるいは「同志的」関係。そう言っているような関係が親子の間に(少なくとも一面では)あったわけなんですよ。それが『やまびこ学校』的世界だったわけなんですよ。

ところが、そういった世界は、社会が豊かになっていくにつれて、どんどんなくなっていってしまうんです。そして、「大人の世界」と「子どもの世界」が明確に区別され、「大人は大人の世界」「子どもは子どもの世界」というふうになり、大人も子どもも考えるようになっていってしまうんです。まさしくそういった世界こそ、山木ゆかりさんが生きていた世界だったわけですね。だからこそ、山木ゆかりさんは、お父さんとお母さんが一生懸命働いている姿に胸を痛めながらも、思ってしまうんです。「だけども……」って。「いったい私に何ができるんだろう?!」って。「何にもできっこないじゃないか!」って。「だって私は子どもなんだもん!」って。「わずか14歳の子どもなんだもん!」って。

と同時に、お母さんもお母さんで、おっしゃるんですね。「お前はまだまだ子どもなんだから、そんなこと心配する必要はないんだよ」って。「暮らしか労働といった問題は大人が心配すべきことなんだから、お前は心配しなくてもいいんだよ」って。「子どもを守るのが親の仕事なんだから、私たちに任せておけばいいんだよ」って。で、「子どもには子どもの仕事があるんだからね」って。「子どもの仕事は学校に行き一生懸命勉強することなんだからね」って。「だから、お前は勉強を一生懸命頑張っていればいいんだよ」って。そうお母さんはおっしゃるんですね。で、そうやって「親が子どもを守り」「子どもは親に守られる」という関係がここに生まれてくるわけですね。つまり、親子が「共に闘う」関係から「守り-守られる」関係へ。あるいは「保護し-保護される」関係へ。そういった劇的な転換が親子の間に起こってくるわけですね。



春日：子どもに愛は伝わっていますか

そうしますと、豊かな時代の家族や親子関係について、どういうことが言えるでしょうか。はっきり言えることは、何よりもまず、豊かさは「どうやって今日一日を生きていくか」「どうやって飢え死にしないで今日一日を生き延びていくか」といった問題から私たち人間を解放してくれるということ。そして、その結果、明日のことを考える余裕を私たち人間にもたらせてくれるということ。したがって、よりよき明日のために今日一日を生きるといった生き方を可能にさせてくれるということ。そう私は思うんです。そうしますと、家族や親子関係のあり方も基本的なところではそういった生き方によって方向づけられるということになってきます。そして、その結果、「幸福追求型」とも言うべき家族や親子関係のあり方が新しく現れてくるということになってきます。としますと、豊かな時代の家族や親子関係は、貧しかったかつての時代の家族や親子関係が「生存追求最優先型」とも言うべき特徴を示していたのとは対照的に、「幸福追求型」とも言うべき特徴を示すようになってくると私は思うんです。そういった意味で、「幸福追求型」とも言うべき特徴を、豊かな時代の家族や親子関係の第一の特徴として挙げてよいと私は思うんです。

次に、よりよき明日のために今日一日を生きるといった生き方が可能になってきますと、親たちは、不思議なことにと言いましょうか、当然のごとくと言いましょうか、子どもの幸せを願うようになってくるんですね。とりわけ、子どもの将来の幸せを願うようになってくるんですね。たとえば、「子どもは自分たちより幸せになってほしい」とか、「自分たちよりいい人生を生きて行ってほしい」といった形ですね。それも、まあ、当然のことと言っていいでしょうね。なにしろ、子どもこそ、私たちの未来そのものなんですからね。ですから、よりよき明日のために今日一日を生きるといった生き方が可能になってくるやいなや、親たちは、たいていの場合、子どもの将来の幸せを願うようになってくるんですね。そして、「子ども中心」の家族や親子関係を作るようになってくるんですね。というわけで、豊かな時代の家族や親子関係は、貧しかったかつての時代の家族や親子関

係が「大人中心」だったのとは対照的に、「子ども中心」になってくると私は思うんです。そういった意味で、「子ども中心」という特徴を、豊かな時代の家族や親子関係の第二の特徴として挙げてよいと私は思うんです。

さらに、子どもの将来の幸せを願うということになってきますと、親たちは、たいていの場合、子育て熱心で教育熱心になってくるんですね。それも、また、当然のことと言っていいでしょうね。なにしろ、子どもの将来の幸せを願うということになってきますと、親たちは、将来幸せになるために必要な条件を備えた子どもに自分の子どもは育てほしいと願うようになってくるはずですからね。ですから、そういった条件を備えた子どもに自分の子どもを育てようとして、たいていの親が子育て熱心で教育熱心になってくるんですね。というわけで、豊かな時代の家族や親子関係は、貧しかったかつての時代の家族や親子関係が「労働中心」だったのとは対照的に、「子育て中心」で「教育中心」になってくると私は思うんです。そういった意味で、「子育て中心」で「教育中心」という特徴を、豊かな時代の家族や親子関係の第三の特徴として挙げてよいと私は思うんです。

\*

というわけで、社会が豊かになってくるにつれて家族や親子関係のあり方も全面的に変わってきて、「生存追求最優先」から「幸福追求」へ、「労働中心」から「子育て中心」で「教育中心」へ、さらには「大人中心」から「子ども中心」へと大きく変わってきたと私は思うんですが、それでは、そういうふうに家族や親子関係のあり方が変わってきた結果、子育ては楽になってきたと言っていいのかどうか。あるいは、豊かな親子関係が作られるようになってきたと言っていいのかどうか。そういった問題が次の問題として、しかも、決定的に重要な問題として、現れてくると私は思うんです。

それでは、そういった問題についてはどうでしょうか。

春日：子どもに愛は伝わっていますか

一般的などころで言いますと、子育てはもちろん楽になってきた。親子関係を豊かに作っていく可能性も大きく広がってきた。そう言ってももちろん構わないとは思いますが、しかし、単純にそう言い切ってしまうえない面も実はある。だからこそ子育てが難しくなってきたんだという面も確実にあるし、だからこそ親子関係が貧しくなってしまうかねないんだという面も間違いなくある。

もちろん、貧しかったかつての時代の子育ては本当に大変だったと思うんです。いまとは較べものにならないくらい大変だったと思うんです。貧乏人の子だくさんと言いまして、貧乏なうえに大人数の子どもを抱えて、食べさせるだけでも大変なのに、学校にも通わしてやらなければならないという状況のなかでの子育てだったわけですから、いまの若い人たちには想像もつかないくらい、大変だったと思うんです。私自身、そういう時代に子ども時代を過ごした人間ですから、そこらのことは自己体験的にもよくわかるんです。

ほんとに、いまでも鮮やかに思い出すのが学級費のこと。私が子どもだった頃、「学級費」というのがありましてね。わずか10円か20円程度のお金だったと思うんですが、毎月一回、学校に納めなければならないんです。ところが、そのお金がないんです。当時10個入りのキャラメル一箱がちょうど10円でしたから、いまで言えば百円か150円程度のお金だったと思うんですが、そのお金がないんです。なにしろ、私が育った家は農家でしたからね。農家というのはお金のない世界でしたからね。ですから、私の家に限らず、どこの家でもお金はなかったんです。その点、農村というのは、漁村とは大違いだったんですよ。同じ農林漁業とひとまとめに言いますが、漁村というのは農村とは違って、お金が動く世界だったんですよ。言うならば、毎日毎日お金が入ってくる世界。それが漁村だったんですよ。なにしろ、漁に出て獲れた魚を売りさ<sup>と</sup>えすればお金が入ってくるわけですからね。で、そのお金を全部その日のうちに使い切ってしまうても、次の日に漁に行けばまたお金が入ってくる。というわけで、毎日毎日お金が

入ってくる世界。それが漁村だったんですね。

それに対して、農村の場合は、一年に一度しか収入がなかったんです。お米が穫れてそれを売ったときに少しまとまったお金が入るだけで、後はほとんど収入がなかったんです。ですから、日常的にはお金がない暮らし。それが農村だったんです。ですから、私の家でも、「学級費ちょうだい」と言ったときに、パッとお金が出てこないんです。そのお金がないんです。そういうとき、おふくろはどうしていたかと言いますと、家で食べる予定だったお米を隣近所のおうちに持って行って、「ちょっとこれ、買ってくれないか」ってやるんです。そうしますと、隣近所には農家でないおうちもあるわけですから、そこのおうちの人が買ってくれるんです。で、そうやって一升か二升のお米を隣近所の人に買ってもらって、何とかしてお金を工面してくるという状況。ですから、学級費の時期になるといつも憂鬱で、「学級費ちょうだい」ってことがなかなか言い出しにくくて、しかし、「学級費ちょうだい」ってことを言わないわけにはいきませんから、言いたくないけど言わざるをえないから言うって感じで「学級費ちょうだい」って言うと、おふくろが、「またかいね?!」と言いながら、お金の工面に出かけていくという、そういう状況だったんですね。

それから、もうひとつ思い出すのが親父のこと。20年以上も前に亡くなったんですが、親父は酒が大好きでした。毎日毎日一合ずつ、本当にうまそうに飲むんです。酒と言っても、焼酎でしたけど。鹿児島でしたからね。ですから焼酎だったんですが、それをうまそうに飲むんです。朝から晩まで働いて、くたくたに疲れて帰ってきて、一日一合の焼酎で晩酌することだけを楽しみに働いているという、そんな感じの親父でした。本当にいい親父でしたけど。で、その焼酎を毎日毎日一合ずつ買いに行くのが子どもの頃の私の仕事だったんです。当時は一合単位で量り売りしてましたからね。ですから、毎日毎日一合ずつ、日もとっぷり暮れた夕闇のなかを、片道歩いて15分ほどもある酒屋まで、買いに行かされていたんです。ほんとに、毎日毎日だったんですよ。一升瓶でまとめて買えばよい

春日：子どもに愛は伝わっていますか

ものを、一升瓶で買うとついつい余計に飲みたくなって、三日で全部飲んでしまうということになりかねませんからね。そうすると、おふくろが怒るんですよ。「お父さんは、もう、一升瓶で買うとすぐ飲んでしまうんだから！」って。だから、「一升瓶で買うのはダメ！」「毎日毎日一合ずつ！」ってことになって、その結果、私が毎日毎日一合ずつ買いに行かされる羽目になっていたという、そういうわけだったんですが、その焼酎を親父はうまそうに飲むんです。で、その焼酎を毎日お猪口一杯分ずつ残すんです。「明日の楽しみに」って。考えてみれば理屈に合わない話ですけどね。だって、毎日お猪口一杯分ずつ残すってことは、次の日もやっぱりお猪口一杯分だけ残すってことになるわけですから、飲む量は結局一日一合ずつということになって、毎日毎日一合ずつ一滴残さず飲んでしまった場合とまったく同じという結果になってしまうわけですからね。ですから、理屈に合わないと言えばまったく理屈に合わない話なんですけど、それでも親父は毎日お猪口一杯分ずつ残すんです。「明日の楽しみに」って。そんな親父を見ながら、「親父って、そんなに焼酎が好きなんかね?!」「焼酎って、そんなにうまいかね?!」って、子どもながらに思っていたものでしたけどね。

ですから、私の親父やおふくろたちの時代の子育てでは、本当に大変だったと思うんです。わずか10円か20円程度の学級費がパツと出せない暮らしのなかでの子育てだったわけですからね。大好きな焼酎も一日一合しか飲めない貧乏暮らしのなかでの子育てだったわけですからね。ですから、当時の子育ては本当に大変だったと思うんです。それに較べますと、いまは大変豊かになって参りまして、かつてのような子育ての苦労はまったく言っていないくらいなくなってきた。そう言ってももちろん構わないとは思いますが、しかし、単純にそう言いきってしまえない面も実はある。だからこそ子育てが難しくなってきたんだという面も確実にあるし、だからこそ親子関係が難しくなってきたんだという面も間違いなくある。

そうしますと、いったいなぜ子育てや親子関係が難しくなってしまったのか、どういった点で子育てや親子関係は難しくなってしまったのか、豊

かな時代の何がどのように子育てや親子関係を難しくしてしまったのか、といった問題が次の問題として登場してくるわけなんですけど、そういった問題についてはどうでしょうか。もちろん、いろんな問題が複雑に絡まり合っていると考えるべきなんだろうけど、少なくともそういった問題のひとつとして、というより、むしろ、決定的に重要な問題のひとつとして、絶対的な強制力と言いましょうか、有無を言わさぬ強制力と言いましょうか、あるいは、逆らいがたい宿命とでも言いましょうか、そういった類の強制力が豊かさゆえに解体させられてしまったという問題があると思うんです。どういうことかと言いますと、こういうことなんです。

ずいぶん以前のことなんですけど、あるとき、居間のこたつにもぐり込んで、何気なくテレビを見ていたんです。「ある芸術家の一生」みたいな番組で、「赤貧洗うがごとき」貧しさのなかを芸術一筋に生きてきたある著名な芸術家の一生を紹介するという番組だったんですけど、そのなかで、その人の「自伝」の一部が紹介されたんです。アナウンサーによる朗読とともに、その人の「自伝」の一部が字幕で映し出されるという形での紹介だったんですけど、その字幕のなかに、「貧乏が嫌い」という言葉が出てきたんです。その言葉を見たとき、私はひどく感動しましてね。「ああ、そうか!」「貧乏が嫌いか!」「なるほどねえ!」って、ひどく納得してしまったんです。どういうことかと言いますと、こういうことなんです。

たとえば、子どもが親に「何々を買ってくれ」と言ったとしますよね。たとえば、私が子どもだった頃、ソフトボールがはやりましてね。小学校3年生から4年生の頃だったと思うんですけど、みんなそれぞれ自分のクラブを持ってきて、休み時間とか放課後にやるんです。ですから、私もクラブが欲しいわけ。だけど「買ってくれ」って言えないんです。とても言う気にはなれないんです。ですから、私は、言えないまま、クラブなしでやっていたわけなんですけど、それでもやっぱり欲しいわけ。ですから、親父に言うんですね。「お父ちゃん……」って。というか、仮に言ったとしますよね。「クラブを買ってくれないか」って。そうしますと、親父はおそらくこ

春日：子どもに愛は伝わっていますか

う言うんですね。「何を言ってるんだ、お前！」って。「そんなのダメに決まってるだろ！」って。で、そのとき親父が言うんですね。「うちは貧乏なんじゃけんね！」って。「だから、お金はないんじゃけんね！」って。「余計なお金は一銭もないんじゃけんね！」って。そうしますと、子どもは、クラブが欲しいのに、「そんなのはダメだ！」と言われるわけですから、「だって誰々だって持ってるんだもん！」とか「俺だって欲しいよ！」って言いたくなったり、「何でダメなんじゃ！」とか「買ってくれたっていいじゃないか、このくそ親父！」って言いたくなったりするかと言いますと、これが、実は、そうはならないんですね。

で、親父も親父で言うんですね。「親を恨むな。貧乏を恨め」って。「うちは貧乏だから、仕方がないだろ！」って。「買ってやろうにもお金がないんじゃ！」って。そう言われましたらね、子どもとしても、それ以上「買ってくれ」とは言えなくなる。なにしろ、親がお金をいっぱい持っていて、それなのに買って欲しくないというんだったら「何で買って欲しくないだよ！」ってことになりましょうし、「買ってくれたっていいじゃないか、このくそ親父！」ってことにもなりましょうけど、親自身が貧乏暮らしのなかであえいでいて、余計なお金などまったくなくて、だから「ダメだ！」と言っているわけなんですから、子どもとしても、それ以上食い下がっていくわけにはいかないんですね。そこで泣く泣く諦めて、退き下がらざるをえなくなってしまうんですね。そういった意味では、「そんなのはダメだ！」という親父の言葉は、逆らいようのない言葉だったわけですね。逆らいたくても逆らえない、否が応でも従わざるをえない、そういった意味では絶対的な、そういう言葉だったわけですね。

しかも、子ども自身、親に言われるまでもなく、自分ですでに分かっているんです。「うちは貧乏だから仕方がないんだ」って。ですから、たとえ「ダメだ！」と親父に言われたとしても、「何で買って欲しくないんだよ！」ってことにはなりようがないし、「このくそ親父！」ってことにもならないんです。なにしろ、「貧乏だからそう言わざるをえないんだ」という、

「そう言いたくなくてもそう言わざるをえないんだ」という、言わば「貧乏が親父にそう言わせているんだ」という、あるいは「貧乏が親父の口を借りてそう言っているんだ」という、だから「親父も『ダメ!』と言わざるをえないんだ」という、そういうことが子どもにも全部分かっていますから、「何で買ってくれないんだよ!」ってことにはなりようがないし、「このくそ親父!」ってことにもならないんです。もちろん、買ってもらえないことはすごく情けなくて、腹が立つことなんだけど、しかし、「親が悪いんじゃない」「貧乏が悪いんだ」「貧乏だから仕方がないんだ」と子ども心に分かっていますから、「貧乏な家に生まれたことが悔しいよ!」とか、「もっとお金持ちの家に生まれたかったよ!」とか、「どうしてこんな貧乏な家に生まれたんだ!」といった形で、言わば、運命を恨むということにはなったとしても、親を恨むということにはならないんです。

しかも、そういった貧乏暮らしのなかであえいでいる親の姿を子どもたちも毎日毎日見ているわけですからね。ほんとに、先ほどもちょっと言いましたように、私の親父は焼酎を飲んでいましたからね、あるとき、聞いたことがあったんですよ。「焼酎と日本酒ではどっちがいいのか?」って。そしたら、「そりゃあ、焼酎がいい!」って、そう親父が言うんです。ですから、私は聞いたんです。「焼酎のほうがうまいのか?」って。そしたら、「いや、うまいのは日本酒よ」と、そう親父が言うんです。ですから、私は言ったんです。「だったら、日本酒を飲めばいいじゃないか」って。そしたら、親父が言うんです。「いや、日本酒だと、一合では我慢できなくなっちゃうんだよね」って。「日本酒は本当にうまいからね」って。「つつい余計に飲みたくなくなってしまいうんだよね」って。しかも、焼酎はお湯で割って飲みますから、同じ一合でも、日本酒の2、3倍の量になるんですね。おまけに、焼酎のほうが日本酒よりうんと安くて、日本酒の半分以下の値段だったんですね。だから親父は焼酎を飲んでいたという、そういうわけだったんですね。本当は日本酒が飲みたいんだけど、貧乏だから焼酎を飲んでいたという、そういうわけだったんですね。しかも、その焼酎すら一日一



春日：子どもに愛は伝わっていますか

合で我慢しなければならぬという状況。ですから、そういう親父が、何と言うか、何となく物悲しくて、痛々しくて、かわいそうで、だから「好きなだけ焼酎を飲ましてやったら親父はどんなに喜ぶだろう」と、子ども心に、「そこはかとなく」程度ではありましたが、思っていたものでしたけどね。

もちろん、私だけではなかったと思うんです。私のきょうだいたちも、よそのおうちの子もたちも、多かれ少なかれ同じような感覚で自分の親を見ていたと思うんです。それが当時の子どもたちの一般的な感覚だったと思うんです。ほんとに、貧しかったかつての時代の親たちは弱くて非力な存在だったんです。圧倒的な貧しさに押しつぶされそうになりながらも、女房子どもの力まで借りながら、生きるための闘いを必死で闘わざるをえなかったんです。朝から晩まで働いて、食べたいものも食べないで、文字通り生命を削っていくような思いで子育てをしながら、一生懸命働かなければならなかったんです。しかも、「はたらけど はたらけど猶わが生活楽にならざり ちっと手を見る」という啄木の歌ではありませんけど、それでも暮らしは楽にはならず、貧乏にあえがなければならなかったんです。だからこそ、「何々を買ってくれ」と子どもが言ったとき、「そんなのはダメだ!」と親父が言ったなら、その言葉は絶対的で逆らいようのない言葉として子どもには伝わっていったんだと、ほんの先ほど言いましたけど、それと同時に、もう一方では、かつての時代の親たちは弱くて非力な存在でしたから、たとえ「ダメだ!」と言われたとしても、「このくそ親父!」ってことになどならなかったばかりか、「そんな親父がかわいそう」とか「早く大人になって楽させたい」とか「親を手伝って喜ばせたい」というような、そんな感覚さえもつように子どもは育っていったんです。

で、そういった感覚というのは、一般的に言えば、親孝行感覚と従来は呼ばれてきた感覚だと私は思うんですが、それでは、なぜそういった感覚をかつての時代の子どもたちが身につけていったのかと言いますと、「そうせよ」と親や学校の先生が教えたからではないんですね。かつての暮ら

しは貧しかったから、そして、その貧しさに押しつぶされそうになりながらあえいでいる親の姿を子どもたちも毎日毎日見ていましたから、だからこそ自然と身につけていったわけなんです。そういった意味では貧しさが身につけさせてくれた感覚、それが親孝行感覚だったわけですね。そういった意味では、言うならば、貧しさというものが持つ教育力、あるいは、貧しい暮らしというものが持つ教育力、みたいなものが間違いなくあったと私は思うんです。

ところが、その貧しさなるものが、社会が豊かになっていくにつれて、どんどんなくなっていってしまうんです。子どもが「何々を買ってくれ」と言ってきたとき、「そんなのはダメだ!」と親が言う。その場合、かつての時代の親たちだったら、「親を恨むな、貧乏を恨め」と言うことができた。「うちは貧乏なんじゃけんね!」と言うことができた。要するに、「そんなのはダメだ!」という理由を貧乏のせいにはできたんですね。だからこそ、「ダメなものダメだ!」って調子で、子どもにも強く言えたんですね。ところが、その貧乏なるものが、社会が豊かになっていくにつれて、どんどんなくなっていってしまうんです。これはもう、子育てや親子関係のあり方という観点から見た場合、本当に大変なことだということが、ちょっと考えただけでもわかりますよね。

子どもの側から言いましてもね、「親が悪いんじゃない、貧乏が悪いんだ」と、自分で自分に言い聞かせることができた。「うちは貧乏だから仕方がないんだ」と、自分で自分を納得させることができた。要するに、買ってもらえない理由を貧乏のせいにして、諦めをつけることができたんですね。しかも、「親もかわいそう」と子どもが感じる。だからこそ「早く大きくなって親を楽させたい」と子どもが感じる。そういった感覚を子どもたちにつけさせてくれた。それも貧乏だったわけですね。その貧乏なるものが、社会が豊かになっていくにつれて、どんどんなくなっていってしまうんですね。これはもう、子どもの側から言いましても、本当に大変なことだということが、ちょっと考えただけでもわかりますよね。

春日：子どもに愛は伝わっていますか

実際、そのことの大変さを痛感させられたことがあったんです。

ずいぶん以前のことなのですが、あるとき、高校を卒業したか間もなく卒業するくらいの男の子で、不登校がちの状態がずっと続いているという息子をもつ母親という人から相談されたことがあったんです。その子の場合、不登校と言っても、いわゆる「ひきこもりタイプ」の不登校ではなく、「問題行動」混じりの不登校で、「バイク大好き人間」タイプの子だったわけですね。ですから、友だちなんかと一緒にあって、無免許でバイクを乗り回しているという状況。ですから、「そういうことはやめなさい!」「バイクに乗るんだったら免許ぐらい取りなさい!」と、そのお母さんはいつもおっしゃっていた。そしたら、その子が一念発起して、免許を取ってしまったってわけ。で、免許を取ったらバイクが欲しくなる。これはもう当然のこと。ですから、「バイクを買ってくれ!」「バイクを買ってくれ!」としつこく言って、母親につきまとっているという状況。そういう状況だったというんですが、幸か不幸か、その子のお父さんがその子以上に「バイク大好き」人間で、それ以外のことについては理解はなくても、バイクについてだけは理解があるという、そういうお父さんだったというんですね。ですから、気前よくバイクを買ってやったってわけ。30万円ちょっとだったとおっしゃっていましたから、いわゆる原付バイク程度のバイクではなく、250ccかそれ以上のクラスのバイクだったんだろうと思うんですが、いずれにせよ息子は当然大喜び。大喜びに喜んで、バイクを乗り回していたというんですね。ところが、バイクを買ってもらって一週間もしないうちに衝突事故を起こしてしまって、バイクはメチャメチャ。本人も大ケガ。そのまま救急車で病院に運ばれて、包帯グルグル巻きの状態でベッドにくくりつけられているという状況。ところが、そういう状況にありながら、本人は自分のケガのことなんかそっちのけで、バイクのことばかり心配してるってわけ。「バイクはどうなったか」「バイクは大丈夫か」「ひどく壊れてしまったんじゃないか」って。実は、その時点でもう、バイクは使い物にならないくらい壊れてしまったということがそのお母さんには分かっ

ていたんだそうですが、本人にはまだそのことは知らせていないという状況。ですから、そのことについて本人は何も知らないまま、バイクのことがっかり心配しているという、そういう状況だったというんですね。

で、そういう状況のなかでそのお母さんは相談に来られたわけですね。「いったいどうしたものでしょうかねえ、先生」って。「あの子のことだから、バイクがダメになったということが分かったら、必ずまた欲しがると思うんです。また買ってこれて、必ず言うと思うんです。その時、どうしたらいいんでしょうかねえ」って。ですから、私は聞いたんです。「お母さんとしては買ってやりたいんですか」って。そしたら、そのお母さんがおっしゃるんです。「買ってやりたいわけ、ないですよ！」って。「だって、この間買ってやっただけなんですよ！」って。「買ってやって一週間もしないうちに事故なんか起こして、自分でダメにしてしまったんですよ！」って。「ですから、また買ってやりたいだなんて、ないですよ！」って。で、「それに……」って、そのお母さんがおっしゃるんです。「弟もいて、前々からパソコンを欲しがっているんですよ」って。「パソコンだって、一セット20万か30万でしょ。そのパソコンを弟も欲しがってるのに、お兄ちゃんばかりというわけにはいきませんよ！」って。ですから、私は言ったんです。「それじゃあ『ダメ!』とおっしゃったら」って。そしたら、そのお母さんがおっしゃるんです。「でもお……」って。「あの子のことですからねえ」って。「言い出したら聞かない子ですからねえ」って。それで、私は聞いたんです。「それじゃあ、お母さん。お母さんが『ダメ!』とおっしゃったとき、息子さんが言うことを聞かないで、『買ってこれー』『買ってこれー』と言ってきたとき、お母さんとしては『ダメ!』を通すことができそうですか」って。そしたら、そのお母さんがおっしゃるんです。「いやあ、あの子のことですからねえ。しつこく言ってくると思うんですよねえ」って。ですから、私は聞いたんです。「息子さんに押し切られてしまいそうなんですか」って。そしたら、そのお母さんがおっしゃるんです。「そうですねえ。言いだしたら聞かない子ですからねえ」って。です

春日：子どもに愛は伝わっていますか

から、私は言ったんです。「だったら、買ってやったら」って。「押し切られてしまうぐらいだったら最初から買ってやったほうがいいと思いますよ」って。

ここで、ちょっとだけ、誤解を招かないように言っておきたいんですが、私は、ダメなら「ダメ！」でいいと思うんです。「絶対ダメ！」なら「絶対ダメ！」と言えればいいし、「何がなんでもダメ！」と言えればいいと思うんです。別に、「子どもが言うことは聞いてやったほうがいい」とか、「子どもが欲しがらんだったら買ってやったほうがいい」なんて、言いたいわけではないんです。ただ、「ダメ！」と言いながら子どもに押し切られてしまって、「しょうがない子ね！」って感じで買い与えることだけは避けるべきだと思うんです。その理由については後で説明しますが、それが最悪だと私は思うんです。ですから、私は聞いたんです。『『ダメ！』が通せそうですか』って。そしたら、そのお母さんが「通せそうにない」っておっしゃいますから、ですから、私は言ったんです。「だったら、もう、最初から買ってやったほうがいいと思いますよ」って。で、「お金はあるんですか』って、私は聞いたんです。そしたら、そのお母さんが、「お金ならあります」っておっしゃるんです。ですから、私は言ったんです。「それじゃあ、買ってやったら」って。「お金があるんだったら買ってやったら」って。『『ダメ！』と言いながら押し切られてしまって『しょうがない子ね！』って感じで買い与えるのは最悪だから、どうせ買ってやるんだったら最初から買ってやったほうがいいと思いますよ』って。そしたら、そのお母さんがおっしゃるんです。「でもね、先生」って。「本当はうちにはお金がないんです」って。で、もう、私はびっくりして、「いったいどういうことなんですか?!』って聞いたんです。「さっきは『お金ならある』っておっしゃったじゃないですか』って。そしたら、そのお母さんがおっしゃるんです。「実は、うちは自営業をやってるんですよ」って。仮にクリーニング屋さんということにしておきましょうか。「実はクリーニング屋をやってるんですよ」って。で、「クリーニング屋をやっていくためには設備投資もい

ろいろしなければならぬんですよね」って。「機械の入れ替えもしなければならぬし、何々も買わなければならぬし」って。「だから、その度に借金するんです」って。「だから、本当はうちにはお金はないんです」って。「もう、借金だらけなんですよ」って。で、そう言いながら、そのお母さんがおっしゃるんです。「でもね、先生」って。「あと30万とか40万だったら、借金しようと思えば借金できるんです」って。「だから、お金なら、何とかしようと思えば何とかできるんです」って。「何とかしようと思えば何とかできるわけなんですから、『ないものはない!』とは言えないんです」って。「本当はお金なんかありませんけどね」って。

ね、皆さん。「すごい話だなあ」とは思いませんか。話それ自体としてはそれほど珍しくもない話かも知れませんが、しかし、「よくよく考えてみたらすごい話だなあ」と、私はつくづく思うんですよね。だって、お金はないんですよ。借金だらけなんですよ。にもかかわらず、「ないものはない!」とは言えないんですよ。だって、「お金なら何とかしようと思えば何とかできるから」というんですからね。

実際、まったくその通りなんですよ。お金なら何とかしようと思えば何とかできる。それが豊かな時代というものなんですよ。たとえば、「クラブを買ってくれ」と子どもが言ったとしますよね。そんなとき、「ないものはない!」とは言えないんですよ。仮にそんな調子で言ったとすると、嘘になってしまうんですね。だって、その程度のお金だったら、たいていは財布の中に入っていますからね。仮にその時点では入っていなかったとしても、いずれそのうちには何とかできる。わざわざ「何とかしよう」なんて思わなくても何とかできる。それが豊かな時代というものなんですからね。

もちろん、クラブを買うといった程度のお金ではなく、20万とか30万といった大金になってきますと、そうそう簡単にはいかないでしょうけど、それでもなお、何とかしようと思えば何とかできる。何ともならないわけではない。ローンを組もうと思えば組むこともできますし、消費者金融だつてないわけではない。まあ、消費者金融まで持ち出したら「ちょっと言い

春日：子どもに愛は伝わっていますか

過ぎ！」ってことになりましようけど、いずれにせよ、何とかしようと思えば何とかなる。たとえば、お父さんが毎晩ビールを飲んでいたとしますよね。仮に、1日500ミリリットル缶ひと缶ずつということにしましようか。そうしますと、1日およそ300円。一カ月ではぼ1万円。1年間では12万円。二年間だと24万円。大変な額だとは思いませんか。それだけのお金をビール代として注ぎ込んでいるわけなんですよ。もちろん、ビール代だけではないと思うんです。それ以外にもいろんなところでいろんなお金を注ぎ込んでいると思うんです。そういったもの全部を合わせると、大変な額になると思うんです。それほど大変な額のお金を注ぎ込みながら私たちは暮らしているわけなんですよ。そうしますと、そのなかから20万や30万のお金を捻<sup>ひね</sup>り出すということも、絶対に不可能とは言えなくなる。もちろん、容易なことではないでしょうけど、いかんともし難いとは言えなくなる。そういった意味では「ないものはない！」と言えない状況。本当はお金に余裕はないんだけど、にもかかわらず「ないものはない！」とは言えない状況。作ろうと思えば作れなくはない状況。したがって、「ある」といえば「ある」と言えなくもない状況。が、しかし、本当は「ない」という状況。そういった状況という意味で、貧しかったかつての時代の「ないものはない！」的状況に対して、「ないけどある、あるけどない」的状況と私は呼んでいるわけなんです。そういった状況こそ、豊かな時代に生きる私たちが置かれている状況なんですよ。

で、そういった状況のなかで子どもが「何々を買ってくれ」と言ってくるわけですね。それに対して、「そんなのはダメだ！」と親が言う。その場合、貧しかったかつての時代の親たちだったら、「うちは貧乏なんじゃけんね！」と言うことができた。「買ってやろうにもお金がないじゃ！」と言うことができた。ところが、豊かな時代の親たちは、そういう言い方はできないんですね。仮にそういう言い方をしたとしますと、嘘になってしまうんですね。何とかしようと思えば何とかなるという、何ともならないわけではないという、たとえお金に余裕はなかったとしても、ギリギリの

暮らしをしていたとしても、何とかしようと思えば何とかなるという、それが豊かな時代なんですからね。

ということはどういうことかと言いますと、豊かな時代の親たちは、「そんなのはダメだ!」という理由を、貧乏のせいにするのができなくなったということなんです。それに対して、かつての時代の親たちは、「そんなのはダメだ!」という理由を、貧乏のせいにするのができた。そうすることによって、親たちは、一切の責任を免れるのができた。それどころか、貧乏という「後ろ盾」があったからこそ、「ダメなものダメ!」って調子で、子どもに強く言うこともできた。「親が悪いんじゃない、貧乏が悪いんだ!」と子どもに思わせることも容易にできた。ところが、豊かな時代の親たちは、そういうわけにはいかないんです。何とかしようと思えば何とかなるという、何ともならないわけではないという、そういう状況の真ただ中で「ダメだ!」と言わなければならないわけですから、貧乏のせいにはできないんです。一切の責任を自分で引き受けなければならないんです。これは、もう、親たちにとって、本当に大変なことだと私は思うんです。かつての時代の親たちのように、貧乏のせいにするのはできず、貧乏という後ろ盾によって守られることもなく、自らが一切の責任を負うべきただひとりの人間として子どもの前に立ちただけ、「ワシがダメだと言うとるんじゃ!」と、真っ正面から子どもに対峙していかなければならなくなってしまったという、それが豊かな時代の親たちが置かれた状況なんです。これは、もう、親たちにとって、本当に大変なことだと私は思うんです。

子どもの側から言いましてもね、やはり大変なことだと私は思うんです。先ほどから何度も何度も言ってきましたように、子どもが「何々を買ってくれ」と言ってきたとき、「そんなのはダメだ!」と親が言う。その場合、かつての時代の子もたちだったら、「親が悪いんじゃない、貧乏が悪いんだ」「貧乏だから仕方がないんだ」と、自分で自分に言い聞かせるのができた。そうやって自分で自分を納得させ、自分で諦めをつけることが容



春日：子どもに愛は伝わっていますか

易にできた。ところが、豊かな時代の子どもたちは、そういうわけにはいかないんですね。何とかしようと思えば何とかなるという、何ともならないわけではないという、そういう状況の真ただ中で親が「ダメだ！」と言うわけですから、子どもの側としましても、簡単には諦めがつけられなくなってしまうんですね。ですから、たとえ「ダメだ！」と言われたとしても、そうそう簡単には退き下がれなくなって、「どうしてダメなんだよー」と言いたくなったり、「買ってくれたっていいじゃないか！」と言いたくなって、「買ってくれー」「買ってくれー」と執拗に食い下がっていくという、そういう結果になってしまうんですね。そして、その挙げ句、「そんなのはダメだ！」と言う親と、「買ってくれー」「買ってくれー」と言い募っていく子どもとが力づくの綱引き合戦を繰り返していき、結局は親のほうが根負けして、「しょうがない子ね！」って感じで買い与えてしまうという、そういう結果になってしまいかねないんですね。で、そういったやりとりがことあるごとに繰り返されていき、その度毎に親が怒りや憎しみをぶつけ合っていて、不幸きわまりない親子関係を営々と築き上げていってしまうという、そういう結果にもなってしまいかねないんですね。

ほんとに、「何という不幸なこと！」と私は思うんです。豊かな時代だからこそ親子がこんな関係になってしまうなんて、皮肉と言えば皮肉なことなんですけど、しかし、それこそが「いま」という時代の親子関係の少なくとも一面なんですよ。まさしくそういった意味で、豊かになった「いま」という時代は、貧しかったかつての時代とは較べものにならないくらい、子育てや親子関係が難しくなった時代なんですよ。

そうしますと、いったいどういうことになってくるかということなんです。いったいどうすれば子どもに愛は伝えられるのか、子どもとの関係を豊かに作っていくためにはどうすることが必要なのか、そういった問題について私たちはあらためて考えてみなければならぬということになってくる。そう私は思うんです。そこで、以下、そういった問題を念頭に置きながら、もう少し話を進めていきたいと思います。(以下次号)